

『就実論叢』第45号 抜刷

就実大学・就実短期大学 2016年2月29日 発行

「親子フラ教室」における卒業と新たな試みの過程

**The Process of Graduation and New Exchange in a Hula School
for Parents and Children**

山 田 美 穂

「親子フラ教室」における卒業と新たな試みの過程

The Process of Graduation and New Exchange in a Hula School
for Parents and Children

山田 美穂

抄録

本論文では、地域貢献事業として継続している「親子フラ教室」の、2014年10月から1年間の活動経過を報告した。この1年間は、オリジナル曲、古典フラ、現代フラと、様々なスタイルのフラに挑戦し、外部の福祉施設での出張フラ活動にも取り組むなど、活動の幅が広がった時期であった。活動開始時から参加していた学生スタッフの卒業式では、母親たちからの心のこもったサプライズ企画が披露され、本活動における相互支援性が再確認できた。また、福祉施設での出張フラを初めとする対外的なイベントは、人前で踊るということをめぐって様々な「他者のまなざし」が行き交う場面であり、適度なストレス場面であるからこそ内面の成長にもつながりうると考える。通常の活動とのバランスを取りながら機会を設定していくことが今後の課題である。

キーワード：フラ、子育て支援、支援者養成教育

目次

1. はじめに
2. 活動経過
 - (1) 第12クール
 - (2) 第13クール
 - (3) 第14クール
3. 考察
 - (1) 卒業式という節目
 - (2) 「他者のまなざし」を意識することの意味
4. おわりに

1. はじめに

教育心理学科の地域貢献事業である「親子フラ教室」の活動は5年目を迎えた（山田・下山, 2012; 2013; 2014; 2015）。2014年10月からの1年の間には、通常の活動を続けながら、外部の福祉施設での出張フラや、学生スタッフの初の卒業式開催など、別れと出会いの多い

時期であった。また、2015年4月からは参加者もスタッフも多忙になり、活動時間の確保が難しくなる中で、細々と活動を継続することが課題となる期間であった。

本稿では、2014年10月～2015年9月に実施された計23回の活動記録をもとに、この期間の経過を報告する。

2. 活動経過

親子フラ教室は基本的に月2回開催、6回を1クールとして活動している。本稿では、第12クール（#71）から第13クールの途中まで（2014年10月～2015年9月）の活動記録を元に、経過を記述する。各クールの期間等の概要を表1に示す。#71の時点で継続参加中だった親子は、Aさん、Bさん、Dさん、Gさん、Hさん、Jさん、Kさん、Mさんの計8組だった。そのうち、きょうだい2人での参加は3組であり、子どもの参加人数は計11人、年齢は1歳10か月～4歳9か月であった。

表1 第12～14クールの概要

	第12クール（#71～82）	第13クール（#83～88）	第14クール（#89～93）
期間	2014/10/1～2015/3/25	2015/5/8～2015/7/22	2015/8/27～2015/9/30
回数	12回（茶話会なし）	6回	5回（9月末までの回数）
活動場所	T608ダンス教室	T608ダンス教室、D105プレイルーム1	T608ダンス教室、D105プレイルーム1
参加者のべ人数 （1回あたり平均）	親子 69組（5.8組） ※子ども107人 学生スタッフ 81人（6.8人）	25組（4.2組） ※子ども41人 27人（4.5人）	39組（7.8組） ※子ども59人 18人（3.6人）
フラ練習曲	手をつなごう／カイマナヒラ	マヌ・オーオー	涙そうそう
子どものためのダンス曲	パクパクフラダンス／エビカニクス／サンサンたいそう	パクパクフラダンス／エビカニクス／サンサンたいそう	ようかい体操第二／月の夜は／パクパクフラダンス／エビカニクス

（1）第12クール 2014/10/1～2015/3/25

10/1では初めてD館プレイルーム1を使用した。オリジナル曲「手をつなごう」の振付が完成し、なでしこ祭に向けて練習を重ねていった。

なでしこ祭では、2日目の12時から教育心理学科の企画「ハートカフェ」でのライブに出演し、続いて13時30分からはダンス甲子園に出場、というハードスケジュールであり、移動や着替えをスムーズにできるかが懸案事項であった。しかし、学生スタッフ7名が、親子出演者の案内、着替えの手伝い、ステージ上での子どもたちのサポートなどに活躍し、無事に同日2カ所での出演という初の試みを終えることができた。

「ハートカフェ」ライブでは、KさんのMCのもと、「月の夜は」「エ・フリマコウ」「ドゥ・ザ・フラ」「手をつなごう」「パクパクフラダンス」「見あげてごらん夜の星を」の6曲を披露した（図1）。ダンス甲子園では子どもたち9人と学生スタッフ7人がステージに上がって「パクパクフラダンス」を踊った。完璧に踊る子、大泣きする子、じっと動かない子、それぞれの姿に「かわいい！」と歓声が上がっていた。

11/1には、高齢者福祉施設の施設祭に参加し、親子4組、学生スタッフ3人、教員1人



図1 なでしこ祭ハートカフェでのライブ(2014.10.26) 図2 福祉施設での出張フラ(2014.11.1)

で出張フラを行った(図2)。学生スタッフが初めてMCを担当し、全5曲を披露した。悪天候のため会場が室内となったが、一緒に踊ってくれた施設スタッフ、「来てくれてありがとうね」と子どもたちにずっと手を振ってくれた女性利用者など、温かい雰囲気の中で楽しんでもらうことができた。終了後には施設祭の食券をたくさんいただき、いなり寿司や焼き鳥などをご馳走になりながら、施設祭を見学させていただいた。

二つのイベントの終了後は、現代フラの「カイマナヒラ」(プイリ曲)に取り組んだ。プイリは子どもたちにも人気であり、他の曲よりも大人に交じって踊る姿がみられた。

12/24にはクリスマス会を行った。1年生女子がサンタに扮して待機し、スマートフォンで鈴の音を流し、司会役の学生が「何か聞こえるよ!鈴の音だ!サンタさんをみんなで呼ぼう!サンタさーん!」という流れが大成功した。子どもたちには学生スタッフ手作りのアルバムがプレゼントされた。また、ゲスト参加のズビャーギナ山田章子先生による「ホワイトクリスマス」に合わせ、全員で踊った。子どもたちは深海魚のように床を滑っていく創作ダンスをしていた。母親たちからは、1年生が司会やサンタなど中心の役割をし、3年生が影のサポート役をしていたのが新鮮だった、とのコメントがあった。

2/24には、8月に訪れた障害者医療福祉施設で、2回目の出張フラを行った。冬の時季であり、感染症の危険性から、母親3人と教員のみでの参加となった。新たに「さいたさいた」に振付をし、「みんなでレッスン」として、お子さん5人と親御さん、指導員の先生、ボランティアさんと踊った。

3/16には、学生スタッフの卒業パーティーをR601教室で行った。手作りのリボンレイと卒業証書を卒業生5人に渡し、祝いの舞を披露した。親子からのサプライズで、以前親子フラ教室に参加していた子どもたちからの手紙が披露され、さらに子どもたち&母親たちから歌のプレゼントとして「おもいでアルバム」「ありがとうの花」が合唱された。歌詞カードは、Bさんのお手製であった。母親たちにマイクを回すと、照れながらも感動的なメッセージを語ってくれた。

3/25にはズビャーギナ山田章子先生によるヨガ講座とミニコンサートを開催した(図3・4)。母親たちはヨガへの関心が高く、「身体が楽になった」「姿勢のクセに気づいた」「ぜひ第2回を」と大好評であった。ミニコンサートでは、Mさんのピアノ伴奏で、「アメイジン



図3 ヨガ講座 (2015.3.25)



図4 ミニコンサートの様子 (2015.3.25)

「グレイス」と「麦の唄」が披露され、皆で生歌に聞き惚れるひとときを過ごした。ミニコンサートが終わるまで、いつもより静かにしていた子どもたちは、終了後のひとときに全力で遊んでいた。生後3週間のg2ちゃんも初参加した。

第12クールは、約6ヶ月・計12回と、他のクールの約2倍の長さとなった。イベントが多く、準備に追われ気味であったことなどから、茶話会で活動を振り返る時間を取れず、クールを区切るタイミングをうまく作れなかったことが、その要因である。

(2) 第13クール 2015/5/8~2015/7/22

母親たちの希望で、久々に古典フラに取り組んだ。パフドラム（大小二つ組の太鼓）で伴奏する曲「マヌ・オーオー」を練習した。「マヌ・オーオー」とはハワイ固有種の鳥であり、かつてはその羽毛で王族のシンボルの飾り（カヒリ）が作られていた。そのためマヌ・オーオーには高貴で猛々しいイメージが付与されている。この曲も力強く床を踏みならすなど、アグレッシブな曲であるため、筆者から「どンドン床を踏んで、日頃のストレスを発散しましょう！」と提案しながら踊った。

子どもたちはパワー全開で遊び、学生スタッフの体力でも受け止めるのが精いっぱいであった。パフドラムが鳴ると駆け寄ってきて叩くのが好きな子、自らパウスカートをはいて登場する子、踊らない！と宣言する子など、それぞれの個性が発揮されていった。

学生スタッフの参加人数が減り、6/24には教員1人のみという回もあったが、年長の子どもたちが年少の子たちを気にかけて、いつもと違う相手と遊ぶ、片付けや掃除を率先して行う、など、大人がたくさんいるときには見られない振る舞いを見せてくれた。

そのような中、1年生スタッフが加入したり、上級生スタッフがわずかな時間に駆けつけてくれるなどして、活動が成立していた。学生スタッフによる「みんなであそぼうタイム」や「ママさんのお話タイム」は実施が難しくなったが、これまでのスタイルにこだわらず、子どもたちが安全に自由に遊べることを重視して活動を続けた。

7/22の茶話会では、1年生スタッフによる三線のミニコンサートが行われた。そこで披露された「涙そうそう」にフラの振付をすることが決まった。

(3) 第14クール 2015/8/27~2015/9/30

7/22に初参加のPさんの紹介で、QさんRさん親子も参加し、新たなメンバーが増えた。初参加の子どもたちもすぐに馴染み、ケンカをしながらもよく遊んでいた。

10月下旬のなでしこ祭では、前年に続き今回も「ハートカフェ」と「ダンス甲子園」に出演することとなり、その練習のため、「キッズダンスタイム」で「ようかい体操第二」を踊ることにした。にわか仕込みの筆者よりも子どもたちの方がよく覚えており、子どもたちに教えてもらいながらの練習となった。大人のリラレッスンでは、母親たちが振付をした「涙そうそう」をレッスンした。

9/24にはゲスト講師を招聘して「リボンレイ講座」を行い、サテンリボンとビーズを縫い合わせて、ランの花をモチーフにしたレイを制作した。完成したレイはさっそくなでしこ祭の衣装として活用することとなった。講座の対象は母親だけの予定だったが、手芸に集中する母親たちの姿に、子どもたちが興味を示した。講師の的確なサポートのもと、何人かの子どもたちが初めて針を持ち、想像以上に危なげなくリボンを縫い合わせることができ、大人たちを驚かせた(図5)。



図5 リボンレイ講座 (2015.9.24)

3. 考察

(1) 卒業式という節目

親子フラ教室が始まった2011年は、教育心理学科にとって新設1年目であり、学生スタッフは1期生のみであった。それから4年、学科の完成を迎えると共に、親子フラ教室も初の卒業式となった。これまでも、学生スタッフは年度ごとの登録制としているため、毎年メンバーの入れ替わりはあった。また、親子参加者も、転居や母親の再就職等のため、参加を終了したケースはあり、しみじみと別れを味わった場面もあった。しかし、明確に時期を定められた「卒業」を祝い、これまでの歩みを振り返るという機会は初めてのことであり、「卒業」という節目があることの意義を考える機会にもなったと思われる。

卒業式当日は、筆者や在校生スタッフが用意した企画の他に、子どもたちからの歌のプレゼント、以前参加していた親子からのメッセージ、と、母親たちが中心となって心のこもったサプライズ企画を用意してくれた。また、母親たちに贈る言葉を一言ずつリクエストすると、子どもたちの母親としてだけでなく、社会人の先輩としての実感をこめた言葉が伝えられた。どれも感動的であり、録音して保存しなかったことが悔やまれるほどであった。子育て支援の対象者である母親たちから、スタッフである学生たちへのALOHAが伝えられる

光景は、本活動の相互支援性を象徴する場面であり、別れの寂しさもありながら、それ以上に、出会いかわり合えたことの喜びを共有する時間となった。

(2) 「他者のまなざし」を意識することの意味

例年の行事となりつつある、なでしこ祭でのダンス甲子園出場・ハートカフェ出演や、2014年度に計3回行われた出張フラは、いつものメンバーでのいつもの活動から、皆で外に出て行くという、通常の支援の枠組みを超えるイベントである。

通常の支援活動は、閉じられた空間で行われることが多く、不特定多数のまなざしを意識することはほとんどない。だからこそ安心して守られた場なのであり、その点で、フラを「披露」するイベントは特異的とも言える。親子フラ教室の活動が、フラというダンスを軸としているからこそ、外に向かって披露するという動きが生じる。そして「外」を意識し交流するということは、踊り手の内面にも様々な動きを生じさせる。人前で踊るということは、見られることであり、自分を見ている相手をこちらから見る、ということでもある。踊り手が集団であり、観客も集団であれば、そこではさまざまな「まなざし」が錯綜する。

他者のまなざしは、ストレスを生じさせる。行き過ぎたストレスは生体にとって害となるが、ほどよいストレスは生体を成長させる。そのことは、イベントの準備、当日、後日の振り返りという流れの中での、子ども・母親・スタッフの姿からもうかがい知ることができる。

一方で、イベントやその準備などのために活動がやや慌ただしくなった時期があったことは反省点でもある。外へ向かって披露することは、内側でじっくり熟成させることとバランスを取りながら行われなければならないだろう。

今後も、フラが披露しやすいダンスであることや、子どもたちをはじめ参加者のエネルギーが高いことを活かし、かつ慎重に参加者の意志を確かめながら、他者のまなざしに触れる機会を整えていくことが重要であると思われる。

4. おわりに

本稿では、2014年10月～2015年9月における親子フラ教室の活動を報告し、卒業生を送り出すという一つの節目と、外へ出かけていく出張フラの意味について考察を行った。

参加人数、活動内容ともに、拡大を続けてきた親子フラ教室であったが、今年度は時間的制約から規模が縮小し、出来る範囲での活動を続けている。大学をめぐる状況の変化に応じて、新たなスタイルを模索しつつ、継続していきたい。

謝辞

楽曲や振付の使用に許可をくださったクム・ケアラ・チン、いつも温かく見守り応援してくださっている教育心理学科の先生方、ゲスト参加してくださった幼児教育学科ズビャーギナ山田章子先生と学生の皆さん、そして本活動に継続参加し、研究への協力および活動内容

の公表を快諾してくださった親子・学生スタッフの皆さんに、深く感謝いたします。

MAHALO.

引用文献

山田美穂・下山真衣 2012 母子・学生・教員による「親子フラ教室」の成立・展開過程—ダンスを通じた子育て支援の試み—. 就実論叢, 41, 121-134.

山田美穂・下山真衣 2013 母子・学生・教員による「親子フラ教室」の変容・成熟過程—重層的な学びと遊びの場として. 就実論叢, 42, 81-97.

山田美穂・下山真衣 2014 母子・学生・教員による「親子フラ教室」の個性化過程—「受け継ぐこと」と「生み出すこと」—. 就実論叢, 43, 197-210.

山田美穂・下山真衣 2015 「親子フラ教室」における模索と探求の過程—レッスン使用曲の変遷から—. 就実論叢, 44, 199-213.